



「節分」(季節を分ける日)と「立春」



旧暦では、2月4日前後の「立春」が一年の始まりです。そのため、立春の前日を「季節を分ける日」という意味の「節分」と称し、豆まきをして一年の穢れ(けがれ)をはらい清める風習が生まれました。豆は「魔を滅する(まめ)」に通じ、無病息災を祈る意味があります。また、まいた豆から芽が出ると縁起が悪いと考えられていたため、炒った大豆を耕へ入れ神棚にお供えしてから使います。一般的に、一

家の主人か、年男(女)が豆をまくものとされています。豆まきの後は、年の数だけ豆を食べると病気にならず、健康でいられると言われていています。年の数だけ食べられない場合は、飲めば食べるのと同じだけご利益があるとされている「福茶」をいただきます。福豆3粒に梅干しと塩昆布を加え、お湯を注げば出来上がり。年の数の福豆にお茶を注いで飲む場合もあります。鬼は鰯の臭いと、柊のとげが大の苦手。節分には、柊に焼いた鰯の頭を刺した「柊鰯」を玄関先につけておきます。木へんに冬と書く柊には、冬の寒気をはらうという意味もあります。

関西発祥の比較的新しい風習に「恵方巻」があります。福を巻き込んだ巻き寿司を、その年の恵方を向いて、願い事を念じながら無言で丸かじりします。近年では全国的に広がりつつありますが、古くは「丸かじり寿司」「節分巻き寿司」「幸運巻き寿司」などと言われていました。



2月はまだ冬の真っ盛り。暦のうえでは春とはいえ、春が産声をあげたばかりで寒い日が続きます。立秋以降の暑さを「残暑」と言うように、立春以降は「余寒」となり、寒さをいたわる挨拶状も「寒中見舞い」ではなく「余寒見舞い」となります。

また、立春から春分間に初めて吹く南寄りの強風を「春一番」と呼びます。気象庁では、風速8メートル以上の風が吹き、前日より気温が上がった時に春一番を発表しています。もともとは、漁師が使っていた風を表すことばの一つで、竜巻などの突風を伴うため警戒していました。日常でも気をつけてください。